

ものから見る世界—博物館から考える

伊藤 真実子

伊藤

本日は、博物館についてお話ししたいと思います。博物館に、よくいらつしやる方々が多いのではないかと思います。博物館が、その場合、東京国立博物館など大きな博物館、しかも企画展に主にお出かけになる事が多いのではないかと思います。本日は、博物館自体について、とりわけ博物館の歴史から、博物館という存在についてお話ししていきたいと思えます。

現在、日本はもちろん、世界中に博物館はたくさんありますが、現在のように、お宝と言われるものを一般の人々が見ることができるといふ形態になったのはフランス革命以降のことです。フランス革命の後、王様が持っていたも

のを国民全体に開放しようということから始まりました。パリにあるルーヴル美術館は、もともとルーヴル宮でした。が、その場所自体を公開して、中の宝物も民衆にも見られるようにしました。大体一八世紀末ぐらいから今のよう一般公開の形がとられていきましたが、おりしも啓蒙が推進される時代であったということもあり、大衆に開かれた博物館がヨーロッパで徐々に増えていきました。その一方で、それ以前までの博物館のような存在は、王侯貴族などがそこでお宝などを保有していて、基本的には、個人や個人の家族や知人の中だけで楽しむものであったということが出来ます。

本日お話しさせて頂きますのは、このような、今のよう

な博物館になる以前の形態、とりわけ個人の蒐集、コレクションの様子とそれを可能にした時代についてです。

現在では博物館といいますが、大部分の場合、時系列や国別といった分類で物や文物が分けられています。このような分け方ではない分類、見方というものが存在する時代がありました。現在から見ますと、そのような展示や分類の形態は、一見したところ混沌としているように見えますが、当時の思想などを考慮してみますと、それぞれの時代に見合った形での連関や分類の思想のもとに、構成されていたことが理解できます。そのような様々な価値観、思想のあり方も博物館の歴史から考えてみたいと思います。

博物館を古代までさかのぼりますと、王様や神殿の宝物庫が、博物館に類する存在として考えることができます。古代ギリシャや古代ローマの神殿、エジプトのファラオの神殿や宝物庫を考えていただくとうっかりやすいかもしれません。また、王のお墓の埋葬品として宝物などが入れられるということがありましたので、墳墓もある意味で宝物を収蔵していた場所と言えるかもしれません。しかしながら、王の墳墓の場合は、当然誰も見ることができませんし、王様が所有していた場合や、神殿におさめられている場合も、基本的には公開が前提ではない、すなわち閉じられているので、ほとんどの人が見ることができないということにな

ります。つまり、古い時代には、宝物が収められている蔵や、保管庫のような場所があったけれども、一般に公開されているわけはありませんでした。

このような時代の宝物とは、いったい何であったかといえます。宗教儀式に関するものや、外国からのものが挙げられます。外国からのものは、遠征から凱旋した將軍は獲得した戦利品を神殿もしくは王様におさめますので、それが宝物となりましたし、外交関係での贈答品も宝物としておさめられました。国内の産物に関しては、鉱物などの玉のようなもの、宝石類、自然物も宝物とされました。この場合の自然物は何かというところ、ユニコーンとかドラゴンなど、超自然的なもの、伝説上の生き物と言われるものや骨やミイラとされるものでした。その多くは、建国の神話、伝説に関連しているものでした。往々にしてそれらのものを持つているから王様であるという、統治の正当性の裏づけにもなりましたし、王様に何らかの超自然的な力を持たせるという意味もありました。

このようなものは、集めるという強い意志があったか、というところ、あまりそうではありませんでしたが、ローマ帝政期のころから個人の蒐集が盛んになってきます。今もローマ郊外にあるハドリアヌス帝の別荘にはギリシャ彫刻の傑作の複製が多数ありましたし、このころには絵画の陳列室や宝物庫がある裕福な貴族の家があったとホメロソヤ

キケロが記述しています。またアウグストゥス帝時代の建築家、ウィトルウィウスが絵画陳列室を邸宅の北側、つまり日が当たらないところに設計していますし、ウィトルウィウスの『建築十書』によると、蒐集の流行から、住宅の設計図に絵画や彫刻をおさめる特別の場所をあらかじめ設けるというほどでもありました。

一方で、日本の古い時代の博物館のような存在を考えてみたいと思います。日本で、古くからのお宝が集まっていたところ、というと、正倉院を思い浮かべられるのではないかと思います。例年一〇月末から一一月の第一週にかけて、奈良の国立博物館で正倉院展が開催されますが、ここで正倉院の中に入っているお宝と思われるものが順次公開されています。福井憲彦監修／伊藤真実子・村松弘一編『世界の蒐集』（山川出版社、二〇一四年）の第一章「集める、収める、愛でる」で、畑中彩子先生が古代における蒐集や保管、人々の間で鑑賞されている様子を細かく書いてらっしゃるので、もしご興味がおありでしたら、そちらの方をお読みください。

正倉院ですが、西暦七五六年の六月に光明皇太后が夫の聖武太政天皇の遺品を東大寺におさめたことに始まりです。基本的には皇室の管理が建て前ですが、実際の管理は東大寺が行ってきています。東大寺は正倉院のほかに東大

寺自身がお宝と言われるものを持っていきますし、唐招提寺、東寺など多くの寺院もお宝と言われるものを所蔵しています。それらは、東京国立博物館などで企画展として展示される機会もありますので、ご覧になったことがあるかもしれません。ここで言われる宝物とは、多くの場合、それらの社寺が所有している経典とか、僧侶が唐から持ちかえったものなどです。

その他、宇治の平等院には藤原頼通以降の藤原摂関家の宝物が収蔵されていますし、近衛家の陽明文庫、冷泉家の時雨文庫など、貴族の家に継承されてきた宝物、典籍などを収め、伝えていく家があります。蒐集に情熱が注がれてコレクションが形成されたというよりも、儀式を後々に伝えるという意味が大きいですので、当主が書いていた日記や、儀式で使用する道具などがお宝としてその家々で大事にされているということが特徴の一つです。

さて、強い意志を持って蒐集しようという、「蒐集すること」が流行したのは、一七世紀から一九世紀のことになります。この頃から、コレクションが形成され、いわゆる博物館のようなものがつくられていきました。

とりわけ、一八世紀半ばから一〇〇年間は、ヨーロッパにおいても日本においても博物趣味というものが一大ブームとなった時代です。人々は身分を問わず、珍しい石や貝

殻、化石を蒐集し、小鳥や昆虫を飼育し、草花の栽培に熱中しました。このようなさまざまな博物趣味を手ほどきする解説書や百科事典、そして百科事典の簡易版も多く出版されました。より精密で写実的で多色刷りの動植物に関する書物や百科全書も人気になり、大名や貴族がパトロンとなって色鮮やかで豪華な図譜を編さんすることもありました。

例えば、ヨーロッパの図譜製作者の一人に、マリア・ジビーラ・メリーアンというドイツ生まれの女性がいます。幼少期より昆虫の変態に興味があつて、昆虫のことをずっと観察しているような少女でした。結婚した後、旦那さんと不和になり、離婚して母方の故郷であるオランダに帰ります。オランダは当時大航海時代を迎えており、南米とかに遠征する船がありました。マリアは娘一人を抱えて南米行きの船に乗つて、南米で一年間にわたり昆虫を観察しながら過ごし、スケッチをして帰ってきます。帰国後にさまざまな昆虫を中心に図譜を描きましたが、昆虫だけを描くのではなく、同時に花々もいろいろな方向から描いていきます。彼女の関心自体は昆虫の変態にありましたが、花と昆虫ともに細密で美しい図譜がつくられました。

スケッチだけでなく、世界中の植物を集めるというヨーロッパのプラントハンターと呼ばれる人が、ヨーロッパからアジア、アフリカなどに送られました。例えば、イギリ

スの有名なプラントハンターであるロバート・フォーチュンという人がいますが、彼は一九世紀中ごろ、日本の暮末期に北京と江戸を訪れました。日本で多くの種類の斑入りの葉を見たときに、当時母国イギリスでも斑入りの葉が大変な人気があつたので、こんな遠いところに来てみたら、イギリスよりも多くの種類の斑入りの葉つばがあると言つて非常に驚嘆したと書いています。また彼は染井村を訪れると、植木屋さんがたくさんあるということに感嘆して手記を残しています。

このころの博物学がいかにはやっていたかは、リン・パーバー『博物学の黄金時代』やリン・L・メリル『博物学のロマンス』にその当時のいかに人々たちが動植物などに熱狂していたかが書かれているので、もしご興味があればご覧ください。

一方、日本では、江戸中期頃になると、讃岐の松平と熊本の細川など、博物大名と呼ばれる大名が、藩内でさまざまな動植物や昆虫を育て、成長の様子を記録させたり、その様子をお抱えの絵師に絵を描かせることでさまざまな図譜をつくりました。平賀源内は、讃岐の松平（五代）が図譜をつくるときにさまざまなアドバイスをしたと言われています。また、個人でもさまざまな物、書籍を蒐集した好事家も日本各地におり、好事家同士でネットワークのよう

なものが形成されていきました。後ほど、詳しいことをお話ししたいと思います。

さて、ヨーロッパと日本の博物学、そして博物館的なものの流行について、もう少し具体的にお話を展開していきたいと思えます。

ヨーロッパですと大航海時代の遠征により、珍しい動植物に対する興味や蒐集熱がどんどん高まっていったというのは容易に想像がつくかと思えます。一方、日本は鎖国下にありました。その中でも限定的ではありますが、外国との交流がありました。ヨーロッパのように政府というか幕府が外に行くことを推進していくような状況ではありませんでした。日本の場合は、そのような中でも、動植物への興味や趣味、さらには博物学が花開いていったという特徴が挙げられます。

まずヨーロッパについてですが、大航海時代に異国から珍しいものもたらされると、人々はこぞってそれを見に出かけました。また、見に出かけるということだけではなくて、キャプテンクックの世界周航のような航海や探検記、ダーウインの乗ったビーグル号の航海記など、航海記そのもの自体も、わくわくするような冒険ものとして人々に読まれていき、異国へのあこがれが掻き立てられていきました。王侯貴族を初め、特権階級にある人々はいち早く、そ

して自分だけの珍しいものを手に入れようとして航海のパトロンにもなりますし、時には異国の動植物を採取して持ち帰らせたり、それが不可能な場合は現地に絵師や調査員を派遣して、帰国後に先ほどのメリーアンのような豪華な図譜を作成させるということがありました。

このように大航海時代に、より遠い地にある物を集めたい、知りたいという流行があつたというのはイメージしやすいかと思えます。実はこの大航海時代にさきがけて、一六世紀ごろにヨーロッパでは文物を蒐集するという一大熱狂するブームがありました。その流行があつたからこそ、大航海時代という遠征が可能になった時代を迎えて、より一層蒐集熱や、博物学に対する熱狂があつたといえるでしょう。

一六〜一八世紀ごろに流行したのは、珍品・異奇物の蒐集で、珍品コレクションの黄金時代と呼ばれています。一五世紀の後半にはイタリア語で書齋を意味するストゥディオとして珍品が集められた私室がイタリアに登場してきます。フィレンツェのメディチ家が有名ですし、ピエロ・デ・メディチ、フランチェスコ・デ・メディチのものが有名です。あとはウルビーノのフェデリコ・ダ・モンテフェルトロのドゥカレ宮殿にも同じような珍品コレクションの部屋というものがつくられました。自分たちの私室に全世界のものを集める、すなわち、みずから全世界を掌握し

ているということの象徴として全世界にある万物を、そして珍しいものまで持っているということが、彼ら諸侯のステータスを示しました。

このような流行はイタリアだけではなくて、一六世紀から一七世紀には、ヨーロッパの王侯貴族の間で一大流行となっていていきました。とりわけドイツを中心として盛んとなったのが「驚異の部屋」(ヴンダーカンマー、クンストカンマー)という、人工物や美術品の部屋です。もう少し後の時代のもですが、コペンハーゲン大学の医学教授にして考古学者、かつ言語学者であった、オーレ・ヴォルムの博物館の部屋の描写が、挿絵として残っています。(図1) 部屋いっばいに、自然物の標本、古代の遺物、絵画があるのがわかります。キャビネットだけに置くのではなく、とにかく隙間なくいろいろなもので部屋を埋め尽くし、人々が入った瞬間に驚かせるようなことも含めたので、このような部屋は「驚異の部屋」と呼ばれました。このように「驚異の部屋」というのは文字どおり床から天井まで、とにかく部屋にものがあふれています。あふれんばかりに物を集めて展示するという、この行為こそが、当時の知の潮流でした。とにかく網羅的に集める、網羅的に驚くほどに展示するというのが知のコンセプトとしてありました。

チロル大公のフェルディナント二世、神聖ローマ皇帝ルドルフ二世、ミュンヘンのアルブレヒト五世など、ハプス

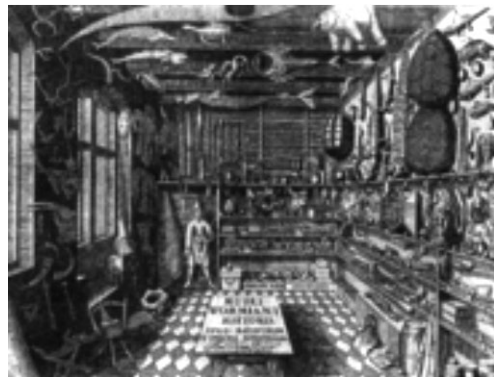


図1 1655年ヴィンゲンドルフ著『ヴォルム博物館』の口絵版画、ケンブリッジ大学図書館蔵

ブルク家も大蒐集室を作成しています。チロル大公フェルディナント二世の甥、ルドルフ二世はプラハ城内に「驚異の部屋」を設けます。彼は神聖ローマ皇帝でしたので、神聖ローマ皇帝としてとにかく万物を手中におさめている、そのことを知らしめるために世界中のもの、珍品奇物の蒐集に力を注ぎました。その一方で、宮廷には天文学者であったヨハネス・ケプラー、ティコイ・ブラーエ、数学者のジョン・デューや画家のジュゼッペ・アルチンボルドらを招聘

して、当時の芸術文化を牽引します。アルチンボルドが書いたルドルフ二世の絵自体が、当時の蒐集する文化、人々を驚かせるという「驚異の部屋」を感じさせます。

博物学は動植物、鉱物など自然の産物を集めるというものでしたが、王侯貴族のほか、医学者や博物学者、薬種商らが主に自然の産物を対象としたコレクションをつくっていきました。

イタリアではピサやパドヴァ、ポローニヤの大学に博物学が研究対象として、講座として設置され、附属の植物園が作成されました。最古の植物園はピサ大学にあり、その次につくられたのがパドヴァ大学の庭園です。パドヴァの植物園がつけられたのは一五四五年です。庭園が、放射線状に区分されて、さまざまな種類の植物が植えられています。この庭園全体の構図ですが、植物学上の分類ではなく、当時の医学、占星術と建築、数学、秘術、など、当時の学問が合わさったデザインとなっています。その中で、どの学問が中心であったかというのは、まだ研究途上でわかっていないのですが、現在から考えて面白いと思われるのが、占星術です。当時の知識人のなかには、「天にあるものは地にもある」ということが共通の認識として考えられていたり、また占星術と医学、植物、鉱物が連関して考えられていましたので、植物庭園の設計が占星術や医術などと関連がありました。ですから今の価値観、考え方から見ます

と、なぜこの配置で並んでいるのかと不思議に思うことも、当時の分類の仕方、物の考え方でいきますと非常に理にかなった分類となっています。

ポローニヤのウリッセ・アンドロヴァンディは、ポローニヤ大学に新設された博物学講座の教授でした。ポローニヤ大学附属の植物園をつくらせ、園長を務め、蒐集したものを収めた自宅の部屋を研究者が自由に利用可能にして、授業もそこで行っていました。現在も彼の部屋は、ポローニヤに現存しています。ほかにも博物学者以外には薬種商としてナポリのインペラートなどがコレクションを形成しています。ローマで非常に有名だったのがアタナシウス・キルヒヤーという修道士です。修道士、しかもイエズス会の修道士でしたので、世界各地の修道士から世界各地に関する情報を得ることができました。当時としては珍しいエジプトや中国の研究、医学の研究、音楽理論も論じたほか、彼は室内にさまざまなものを展示する博物館のようなものを作成しました。

イギリスで有名なのがジョン・トラダスカント親子です。親子ともジョン・トラダスカントという名前ですが、バッキンガム卿、ジェームス一世にも仕えた庭師にして博物学者でした。お父さんのほうのジョン・トラダスカントはロシアやアルジェリアなど、北アフリカを回って植物を集めて回り、ジェームス一世から賜った敷地に庭園とコレ

クシヨンの館をつくり、「トラデスカントの方舟」と呼ばれていました。お父さんのトラデスカントの蒐集した自然物ないし植物に、息子のほうのジョン・トラデスカントは珍品奇物のコレクションを加えていきましたが、この親子が亡くなりますと、息子のほうのトラデスカントの協力者であったエリアス・アシュモールという人がその所有権を継承します。トラデスカント親子とアシュモールのコレクションがあわさったコレクションがオクスフォード大学に寄贈されて、現在はアシュモリアン博物館として見る事ができます。

実は、庭師は非常に博物館、ひいては博覧会と密接な関係にあります。イギリスの有名な庭師であったジョセフ・パクストンは、庭園の設計で有名でしたが、温室も設計しています。当時、温室は最先端であったガラスと鉄でつくられました。ロンドンで第一回の万国博覧会が開かれたときに、水晶宮と呼ばれたメインパビリオンがつくられます。これは鉄とガラスでつくられたパビリオンですが、これを設計したのがパクストンでした。

大航海時代になりますと、より遠方への熱も高まっています。ただしその一方で、自分たちの身近なもの、自分たちの住んでいる海辺にある貝殻や動植物にも徹底的な調査が進んでいきます。次第に蒐集する対象物が膨大に増えていきました。そうしますと、さすがに分類をしないとど

うにもならなくなってしまう。とりわけ相続の場合、目録をつくらなければいけない場合がでてきます。ただし、みなそれぞれ勝手に自分で名前をつけてしまうと、本人以外にはわからないこともでてしまいました。そこで、他人にもわかるような目録を作成する必要があります。おりしも一八世紀のころにリンネが二語式命名法を主とした分類法を提示しました。これが、文物があふれている、あふれんばかりに物が集められていた時代に、分類や命名作業に「ちようどいい」ということで、ヨーロッパ中に非常に大きなインパクトを与え、あつと言う間に広がりました。リンネが「分類の父」と呼ばれるようになったというわけです。

さて、今まではヨーロッパのお話でしたけれども、日本の博物趣味、そして個人の蒐集家についてお話ししたいと思います。日本の博物学は江戸時代後期に隆盛を極めます。今まで「博物学」とお話ししましたが、日本や中国などでは本草学といえます。ほぼ同義語と考えていた方がいいと思います。日本で本草学が盛んになったのは幕府財政の立て直しを主題とした徳川吉宗による享保の改革がきっかけでした。吉宗は財政が悪化した原因の一つには、薬種（薬の原材料）を中国から輸入するのに非常にお金がかかることにあると考えます。対応策として、国内産で間

に合わせるができないだろうかということで、各地で特産物や薬種の原料を見出し、さらに育成、促進する殖産興業政策を命じました。

そこで、各藩の藩主が領内で薬草や鉱物、鳥獣、魚介や昆虫に至るまで、利用できるかどうかにかかわらず、とにかく調べて報告させるという命令が吉宗から一七三四年「諸国産物調査」として命じられます。そうしますと先ほど少しお話ししましたが、動植物など自然物に格別の関心を向ける博物大名があらわれました。

この産物調査は、国内でのさまざまな動植物、鉱物などが新たに発見されるきっかけとなりました。すると、当時の本草学の教科書とされていた李時珍『本草綱目』には掲載されていない物などが出てきます。そうしますと本草家、医師、薬種商人が手元にある薬物の原材料や珍しいものに至るまで、「これは何であろう」「何の種類か」という珍奇なものや疑問のあるものを持ち寄って質疑応答や情報交換をする場が設けられました。薬品会（ヤクヒンカイ／ヤクヒンエ）と呼ばれた会です。最初は、「これは何か？」という薬種を同定する作業でしたが、やがては専門家以外にも開いて、珍品奇物をみんなで見せ合うというような見せ物的な場になっていきました。

この珍品奇物を見せるといふ薬品会の始まりを考案したのが平賀源内でした。平賀源内は一七五七年に第一回の

薬品会を江戸で開きます。源内は一七五六年三月に讃岐を出た後に、大坂を経て、江戸で当時非常に有名な儒学者でありました田村藍水に弟子入りし、薬品会を提案しました。源内による薬品会は、第一回以降、ほぼ毎年一度ずつ計五回開催されましたが、第五回にあたる東都薬品会は一七六二年閏四月に湯島天神前の料理屋であった京屋で開かれました。そこでは約一三〇〇種余りの品が展示されました。これほどまでに物が集まったのは平賀源内が前年にチラシを刷り、全国に公募を募ったからです。本草関係の本に掲載された公募を募るそのチラシで、翌年の閏四月に薬品会を開催するということが宣伝されました。チラシには、出品手続きも書いてあります。どのような出品手続きかというと、出品者は全国に二五カ所設けられた諸国産物取次所に物を持ち寄ると、そこから江戸、京都、大坂の請取所に送られて、さらにそこから源内に送られるという仕組みです。運賃は全て主催者が負担しました。取次所となっているのは諸国の本草家や薬種商でした。つまりこのころまでには、全国規模で本草家や薬種商のネットワークが形成されていたことがここからも見てとれます。

源内の薬品会がきっかけとなり、江戸や大坂、長崎、熊本、尾張をはじめとした全国で薬品会が開催され、盛況でした。寺門静軒が書いた『江戸繁昌記』に、このころ江戸にはやるものの一つとして、薬品会が挙がっていたほどで

した。

今までお話ししたのは本草学者や医学者、大名についての話でしたけれども、そうではない民間人、一般人の好事家にも、学者レベルの知識を持ち物を蒐集する人がいました。その好事家の中でも当代一と言われて全国から訪問者が絶えなかったのが大坂の木村兼葭堂という人です。

木村兼葭堂は、大坂に生まれた一八世紀から一九世紀にかけての当代一の蒐集家、好事家です。家業は造り酒屋を営んでいましたが、お酒が飲めず、煎茶を好みました。自伝によりますと、生来病弱であった兼葭堂を心配した父が、家の中で何かできることということで、草木を愛でることを勧め、本草学や、絵画などを学ばせました。成人すると、本草学の勉強が高じて、さまざまな書籍、珍しいものなどを蒐集するようになりました。兼葭堂のコレクションは、和漢洋の書籍や地図、古書画、動植物、鉱物の標本、顕微鏡などの西洋の珍しい器具、古銭、古器物など、ありとあらゆるものを集めていまして、文字どおりそれを見に全国各地からさまざまな人が訪れました。

兼葭堂が記した日記、『兼葭堂日記』は、四四歳から六七歳までの間であり、うち四年間を欠いていますがほぼ一九年余りの日記です。日記といっても芳名録のような感じで、兼葭堂が、家に来た人、会った人をほぼ記していま

す。一九年余りで六五〇〇人を超える人名が記されていて、延べにすると三万九〇〇〇人を超えます。四四歳からの日記であるために、それ以前の交友を考えますと、さらに莫大な数の人々と兼葭堂は交流していたということが想像できます。その中には島津や松浦静山のような大名、大坂の懐徳堂と木村兼葭堂の家は近かったことから懐徳堂の学主中井兄弟や、懐徳堂に全国から学びに来た人々も兼葭堂の家を訪ねました。伊藤若冲、田山応挙などの絵師、田能村竹田、谷文晁など、儒学者、蘭学者、医者、本草家、画家、文人、幕臣や植木屋さん、版元までさまざまな職種身分の人が訪れ、北は松前から南は薩摩種子島までその出身がありました。時にはオランダの商館長も長崎から江戸への参府途中に兼葭堂の家に立ち寄ったこともあります。

兼葭堂は訪問客の相手だけではなくて、書画会や物産会、薬品会などにも積極的に出かけますし、遠方の客とは書翰で交流を深めました。非常にまねな人であったことがうかがえます。ただ、兼葭堂のコレクションは、兼葭堂存命中に一度罹災しているの、失われてしまったものが多く、目録も生前中にはつくられなかったので、全体としての規模がどのようなものであったのかというのは、正確にはわかりません。ただし罹災後にも蒐集を続けましたので、そのうちの何点かは残っていますし、書籍の一部は、現在、内閣文庫に引き継がれています。

なぜそれほど蒐集できたのかというと、大坂は東西の交通の要路であっただけではなく、舶来品を扱う唐高麗物屋と呼ばれる舶来品専門店のお店が多くありました。というのも、長崎に輸入された唐薬、薬種はまず大坂に船で運ばれ、大坂の薬種問屋を通じて全国に販売されましたので、珍しい薬種や書籍などは大坂ではほかの地域よりは非常に簡単に集める、入手することができました。ですから兼葭堂のほかにも、大坂には山片蟠桃という商人学者がいましたが、彼もまた物や書籍の蒐集で有名でした。

とはいえ、現在も残っている蒐集物や文書記録から、兼葭堂の蒐集状況や、それを見に来た人との交流の様子が伺えます。取っ手のついた重箱におさめられた貝と石の標本箱があります。現在大阪市立自然史博物館が所蔵しています。兼葭堂と交流のあった頼春水、頼山陽の父によりますと、兼葭堂は来客との対話や要望から蔵書や自慢の品を蔵から出してきたそうです。その際には兼葭堂自身や、もしくは同席した妻シメとめかけのフサが行っていました。おそらく、貝石標本箱のような、取っ手のついた重箱におさめられたものを客人のまえに運び、見せていたのでしょう。兼葭堂は、蒐集は考究のため研究のためであるということを常々言っていました。兼葭堂の家を訪ねるには紹介状が必要でしたが、研究のため、考究のためであれば、物の貸し借りをいとわず、仲間内で「これを貸してくれ」と言

われればすぐにも貸し出したことが、書状などからわかっていきます。そして兼葭堂自身も知識と画才を生かして本草書を作成し、また兼葭堂は古代遺物、考古遺物に関して、今でいう論文のようなものも書いています。中国から手に入れた貴重な美術書も参考にしていますが、またその貴重な美術書をもつと世に広めたいということから、自費で刊行することもありました。

彼の作成した本草書、さまざまな珍品奇物を解説した本の中に、ユニコーンとかイッパクのような挿絵もあります。これはもちろん洋書籍の漢訳などからとったのがわかっていまずけれども、中にはキルヒヤーの『地下世界』からとられた挿絵と同じものが見受けられます。

このように鎖国下というか、対外交流が限定的であつても、国を超えて、キルヒヤーと兼葭堂がつながつていつたと考えるととてもおもしろいのではないかと思います。どこまでも知りたい、現実のものを手にしたい、見てみたいという知識欲が、人々との交流であつたり、世界との交流を深め、好奇心を高めていたのではないのでしょうか。

兼葭堂の邸宅は、多くのものが蒐集されている博物館的なものでもあり、外国の書物を豊富に収蔵する図書館のような存在でもありました。先ほど申し上げましたように、兼葭堂のところには非常に多くの人々が集いましたので、アカデミーやサロンのような役割をも果たしていたと言え

るでしょう。また、兼葭堂の家の近くには懐徳堂があり、また、懐徳堂で学ぶ人たちは、兼葭堂の邸宅を図書館がわり、博物館がわりに訪れるというようなこともあったと想像できます。ですから、知のサロンとしての役割を兼葭堂が当時担っていたことが推測されます。

このように現在の公共の博物館や図書館とは違う形ですが、けれども、ヨーロッパにせよ、江戸時代にせよ、いろいろなものを集めて人々に見せる、人々の中で文物についての知識を分け合うというような形は様々な所で見られました。

最初に、一般の人々に見せるようになるというのはフランス革命の後であるという話をしましたが、日本でも現在につながる博物館が設置されたのは明治維新以降のことです。一八七一年に文部省に博物館が設置されますと、当時文部省になった湯島聖堂の中で、文部省博物館主催の博覧会が開かれます。この博覧会は一定期間開かれましたが、博覧会の閉会後は一と六の付く日（この日は当時の官吏の休日でした）に開館する常設の博物館となりました。これが現在の東京国立博物館の起源です。

このような博物館や博覧会といった事業を推進したのは、幕末から明治初期にかけて欧米を視察し、博物館や博覧会を実際に見て回った人々でした。幕末に軍艦奉行、外国奉行などを歴任して一八六七年のパリ万博を訪れた栗本

鋤雲はエクスポジションを博覧会と訳します。岩倉使節団の一員として一八七三年のウィーン万博を見聞した大久保利通は、帰国後、殖産興業政策の一環として国内での博覧会の開催を推進し、一八七七年に第一回国勸業博覧会が上野で開催されました。幕末にヨーロッパを視察した町田久成はロンドンで大英博物館を訪れています。それにより博物館のモデルとして大英博物館を思い描き、上野公園に博物館ができたときに図書館の併設を考え、遂行しました。また一八六七年のパリ万博を視察した田中芳男は、パリ滞在中に王立植物園を訪れます。ここは動物園と研究施設を併設していましたので、第二代の館長に就任する田中は、上野には動物園と博物館がなければいけないと考えて陳情しました。植物園は小石川があるのでということで、上野に動物園ができることになりました。

このように博物館ができますと、もちろん政府が推奨した啓蒙政策の一環としての教育施設という目的もあります。物を見て学んでいく、知識を高め、好奇心を満たしていくということが大衆の娯楽ともなっていました。

さて、最後に、少し現在における博物館と、博物館を取り巻く状況についてお話ししたいと思います。現在ではさまざまな博物館で展示の仕方をめぐって問題や論争が起こっています。例えば物をめぐってですと返還論争があります。これは「戦利品だ」「略奪品だ」「強奪だ」と言って、

返還要求が出ていることがあります。

もう一つは見せ方をめぐるものです。先住民ないし原住民の人々の今の生活や文化を、タイムマシーンに乗って古代の人々の生活を見る、というような意識、感覚で展示しているのではないか、というような問題が提起されています。これは、人類学、民族／民俗学や現代アートの展示などから異論が出はじめました。

このような展示論争の一例をあげてみたいと思います。ニューヨークにある自然史博物館です。自然史博物館の入り口正面には、銅像が建っています。馬にまたがった人がいて、左側にネイティブアメリカンと思われるような人が右側にアフリカから連れてこられた奴隷と思われるような人がいる銅像です。真ん中で馬にまたがっているのは第二六代大統領セオドア・ルーズベルトです。ニューヨークの自然史博物館は、一八六九年に建てられています。この銅像は一九世紀の博物学の見方をあらわしているもので、現在も博物館の入り口にあります。

自然史博物館ですが、中では恐竜やマンモスの展示があります。そして、人間というか、地球上で生活している人々の文化という感じでしょうか、人類学の展示としてアフリカの人々の展示、北極圏のイヌイットと呼ばれる方の生活を人形と生活の様子を見せた展示や、ネイティブアメリカンの人々の展示などのほか、日本人の展示があります。い

ずれも人形をつかって文化や生活が見せられています。唯一白人の展示だけがありません。一九世紀の博物学の見方が博物館設立の起源としてありますので、当時の人類学では白人がトップに位置していますし、白人から見た世界です。それで、彼らの展示だけは当然ないということになります。それが今もなお続いていますが、ただし先ほども申し上げたように、このような類の人類学の展示のあり方は、世界的にも非常に問題になっていますので、このような展示について、何とかしたいというような試みが世界各地で行われています。

その中の一つのとりくみとして、大阪の万博公園の中にある国立民族学博物館についてお話しします。ここでは世界各地の民族学の展示がなされていますが、このような問題に取り組み、展示がリニューアルされました。世界各地の人々の生活を、まさに今ある生活の様子、たとえば古くからの生活習慣や居住空間、儀式についても、現在ある道具や資材を使いながらおこなっている様子を伝えるように工夫されています。ただし、非常に配慮されて、考えられてつくられているのはわかりますが、人間というのは、圧倒的な情報量に触れる場合、得てしてそれまでに知っていたことを補完するように、自分のなかでストーリーというか、仮説をたててみてしまうものかもしれません。これは私自身がその展示をみたときの感想なのですが、どうして

も先入観というかすでに持っている知識を確認するように新たなものを見てしまいがちであり、その先入観と展示が一致すると安心するよう感じました。すなわち、こちらの想定をこえるものであると、もちろん興味深いのですが、それが圧倒的な情報量となると、受けた側として消化しきれないという状況になってしまいかもしれない、と思います。

一方で、最近では、様々な博物館で個性的で、刺激的な展示、すなわち企画色が濃い展示を見ることがあります。知的興奮にあふれ、それまでの見方を変えるような楽しいものはありませんが、意外に、その見方も、企画者の考えであって、見る側に想像する余地を残す部分が少ないのではないかと感じるものもあるように思います。どのように、何を展示するのか、何を展示しないのか、ということは、今現在、博物館の展示というものが抱えている問題の一つということが言えるかもしれません。展示されたものから世界が見えるということもありますけれども、そこに展示されていないのはなにか、何かそこに欠けているものがあるのではないかということをも含めて考えていくというものも、現在ある世界の見方を考える一つの手がかりになるのではないかと思います。博物館の展示というのは企画展にせよ、常設展にせよ、社会状況であったり、その時代に関する現在における研究をあらわしていたりすることがあ

りますので、物を単にきれいだとかおもしろいなど見るだけではなく、全体としてどういう流れでそれが置かれているかということを考えながら見ると、博物館から現在の世界の動きが見えてくるかもしれません。

本日は、博物館の歴史から、現在まで、非常に雑多な話でしたが、以上で私のお話を終わります。どうもありがとうございました。

(了)